

# 一宮町の歴史特集 特別編 戦後75年 一宮町と太平洋戦争（上）

令和2年（2020）はまだ半年しか経っていませんが、この年は歴史上名を残す年となるでしょう。新型コロナウイルスのパンデミック、それに伴う東京オリンピックの延期。どれも未曾有の出来事であり、いまだ終息の見通しもたっていません。これからどのくらいかかるかわかりませんが、私たちはこの脅威を克服していかなくてはなりません。

さて、今年（昭和20年（1945））の終戦から75年目の年です。戦争を経験された方が少なくなり、この歴史を風化させずに、後世にしっかりと伝えていかなくてはなりません。今回から2回にわたり、一宮町と太平洋戦争について綴っていきます。



▲ 風船爆弾打ち上げ基地跡（一宮 6-35 付近）

## 風船爆弾

一宮町と戦争の歴史を語るうえでまず思い浮かぶのが風船爆弾でしょう。風船爆弾は日本陸軍の秘密兵器で直径約10mの気球に爆弾を吊り下げ、アメリカ本土を攻撃する兵器でした。昭和19年（1944）11月から翌年3月にかけて、一宮と勿来（福島県いわき市）、大津（茨城県北茨城市）の3か所の基地から打ち上げられました。合計で約9000個が打ち上げられ、約300個がアメリカ本土にたどり着いたといわれており、オレゴン州では民間人6名が犠牲になりました。

一宮海岸に築かれた基地は円形のコンクリート台が数基築かれ、その一部には風よけのために高さ約20mの暴風壁が造られたといえます。その基地にむかって、物資の運搬用に上総一ノ宮駅から引き込み線（線路）がひかれました。この線路の建設には地元住民の方も「勤労奉仕」として従事したといえます。戦後、打ち上げ基地の土台部分のコンクリートは破壊され、地元の人々が持って帰りました。そのうち

の一つが、現在町教育委員会で保管されています。

昭和51年（1976）、時の向井十郎一宮町長はオレゴン州知事に宛てて、犠牲者への哀悼の文書を送りました。その後同州のストラウヴ知事から感謝の返信があり、現在その資料も教育委員会で保管されています。



▶ オレゴン州知事からの返書

## 本土決戦への準備

戦局が悪化する中、一宮を含めた九十九里沿岸でも本土決戦にむけた準備が進められました。昭和19年7月には「本土沿岸築城実施要綱」が定められ、九十九里浜や鹿島、八戸等に陣地の構築が命じられました。

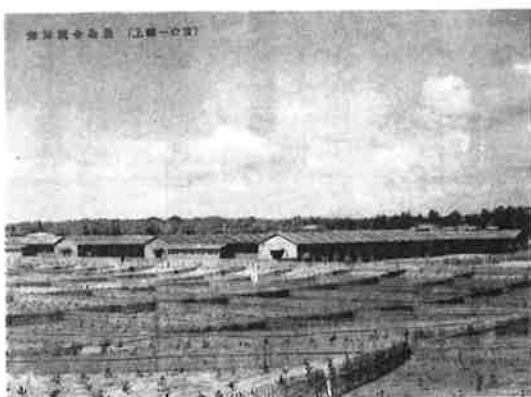
昭和20年2月には本土決戦のために編成された陸軍第147師団歩兵第426連隊が一宮に配属され、洞庭湖周辺に指揮所壕や砲台が築かれました（※現在は私有地のためこれらの戦跡は見学できません）。防空壕掘りや砲

台の基礎作りには、風船爆弾への引き込み線作り同様、地元住民の方が「勤労奉仕」として従事しました。

## 一宮海岸の陸軍廠舎

開戦以前から、一宮海岸北側には陸軍の演習場である廠舎がありました。実弾演習のほか、太平洋に面していたため、遊泳演習もあつたそうです。この廠舎は戦後まもなく火災にあい、焼失したといえます。

ちなみにこの廠舎は左の写真のように、絵葉書として発行されていました。廠舎の内部の写真の他洗面所までもが絵葉書になっています。



▲ 海岸にあった陸軍廠舎

（次号へつづく）